

長岡京市社会福祉協議会会長杯 ウェルネスダーツトーナメント大会開催-福祉倶楽部の利用者さん奮闘

8月3日ウェルネスダーツ大会が長岡京市のバンビオで開催されました。この大会にはわたしたちが暮らしを支えている認知症を患い「要介護3」の認定を受ける独り暮らし84歳の男性Oさんが選手として出場しました。Oさんは直前にあった事も記憶出来ません。今お伝えしたことも次の瞬間には忘れてしまう重度の記憶障害があります。

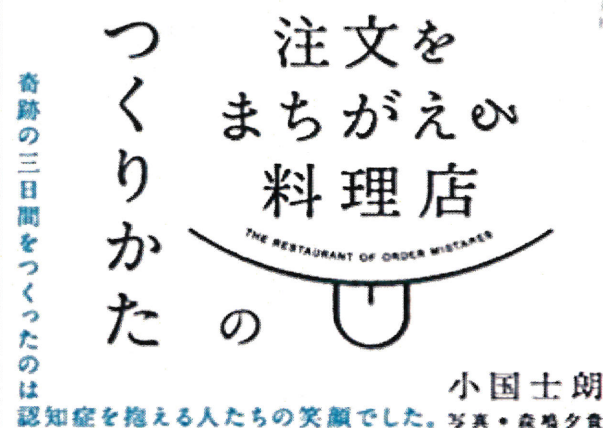
そんなOさんですが、彼にはこれまでに培ってきた力がまだまだ残されています。学校の国語の先生を長年勤めてきたこの人の書道の能力はピカイチですから彼は毎月地域で書を認知症カフェに参加した人たちに教えています。その会場にはひとりでは行けません。だからきょうと福祉倶楽部のガイドヘルパーが会場にご案内しています。そして残されたもうひとつの能力が老いるまでずっと続けていたスポーツを通して培われた運動能力です。その能力はこの大会でも大いに発揮されました。彼の投げたダーツは的のど真ん中に見事命中！この活躍で二回戦まで進出しました。しかし、三回戦は規程により彼は参加出来ず残念ながら敗退しました。

認知症になると多くの人にはなにもできなくなるという思い込みがあります。でも彼を見てもらえばできる事はたくさんあることが分かります。

Oさんはそのことをたくさんの人に教えてくれます。



本の紹介



「注文を間違える料理店の作り方」
小国 士朗 著
四六並製、オールカラー 360頁
定価:1,600円+税
ISBN:978-4-908925-21-4

著者の小国さんはテレビディレクター。そして彼が仕掛けた「認知症」を患う人たちで運営される「注文を間違える料理店」の記録。

この本に詰め込まれたものはお年寄りには想像以上の力が残されているという事です。

家族も支援者も認知症のお年寄りは「何もできない」という思い込みが蔓延しています。

ところがどっこい、皆さん素晴らしい力を残しています。

注文を間違える料理店の実践はその事実をあらためてわたしたちに示しています。

この本が伝えたいのは実行委員長のこの言葉に濃縮されています。「認知症がある、あるいは身体に障がいがあるというだけで、いっばいやれることがあるのに、できる事を発揮する機会を奪われる」
そんな介護の現場を戒め、事実でもってその誤りを教えてくれます。

わたしたちの事務所を利用している利用者の方も重度の認知症の人たちがいます。その人も適切な支援さえあれば自尊心を奪われることなく暮らしていただけています。

この本を読んであらためて認知症の人が持つ力を信じて利用者主体の支援を続けたい、そして利用者の枠にとらわれずこんな実践の場を生み出したいと考えヒントと勇気を与えてもらいました。